

第4回 アントン・グディングス神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



1963年（昭和38）に設立された神田外語学院は、英語学習熱の高まりのなかで、飛躍的に学生数を増やしていきました。1969年（昭和44）には学校法人佐野学園が設立され、1976年（昭和51）には専修学校としての認定を受けます。急激な成長の一方で、学院はイギリスやアメリカから外国語の英語教授法（TEFL）の資格者を教員として採用するとともに、画期的な英語教授法「タスクベース・シラバス」を導入することで、英語教育機関として内容の充実を図っていきました。学院の先進的な語学教育の道を切り拓いていったのは、イギリスと日本の両方の文化を理解するひとりの人物でした。神田外語学院、アントン・グディングス第4代学院長の物語です。

神田外語との関わりを話す前に、少し私自身の生い立ちのことを話しましょう。



私の父は朝日新聞の新聞記者で、特派員としてロンドンにいました。父はそこで母と出会い、結婚したのです。1920年代のことです。1928年（昭和3）になり、母は私を身ごもったのですが、父の帰国が決まりました。母は私を英国で生みたがっていました。父の帰国の予定日は変えられない。英国船籍の船に乗り、日本に向けて出航しました。当時は、英国から日本まで3カ月かかりました。

日本に到着してすぐに私が生まれました。母は英国国籍にこだわり、乗って来た客船が英国船籍だったので、船長に頼み込んで船上で生まれたことにして、英国大使館に書類を出してもらいました。そこで、イギリス人としての国籍をもらいました。でも、父は父で、「息子は日本人でなければならない」と大森の区役所に届けていましたから、日本人としての国籍も持っていたのです。日本名は「安敦（やすあつ）」。アントンの当て字ですが、父は母とロンドン（倫敦）で出会ったので、「敦」の一文字を入れたかったそうです。



帰国すると父は大森に大きな洋館を建てました。母が望んだのでしょう。母はあくまで私を英国人として育てようとしていました。学校は横浜のセント・ジョセフに通いました。今で言うインターナショナル・スクールですね。日本人はこういった外国の学校には入れませから、きっと母や父がいろいろと働きかけたのでしょう。セント・ジョセフでは2回ほど飛び級をしました。

第二次世界大戦が始まり、1944年（昭和18）には学校が閉鎖され、外国人の先生方はキャンプ（強制収容所）に入れられてしまいました。高校を卒業する1年半前のことで、16歳でした。外国人が行ける学校なんて他にはなかったけれど、両親が調べてくれて、早稲田大学で学べることが分かった。今でこそ早稲田大学には国際部があり、千人規模の留学生を受け入れています。当時、早稲田で学んでいた外国人は8人ぐらいでした。

1945年（昭和20）になると東京への空襲も激しくなり、今度は早稲田大学が空襲を受けた。それで学校が閉鎖になってしまったんです。一方、新聞記者をしていた父は、英国人である母と結婚していたこともあり、憲兵に連行されました。母は父を助けようとずいぶんと動いたようです。ある日、父が突然帰ってきました。軍服にサーベル下げて。驚きましたね。軍属になれば釈放すると言われ、受け入れたのです。父は外国語ができたから、インドネシアあたりの南方に捕虜収容所の所長として派遣されました。

父がいなくなると、母はスイス領事館に助けを求めました。当時は、英国の大使館がすでに引き上げていて、スイス領事館が窓口だったんですね。領事館は英国側と協議をしてくれて、毎月、お金と食べ物を支給してくれることになりました。私たちは外国人でしたが、国際法では女性と子どもは強制収容所には入れられないのです。東京にいると危険なので、軽井沢へ避難しました。1945年の春のことです。当時は、日本の同盟国は箱根、連合国は軽井沢に避難していました。

ただ、スイス領事館からは毎月、東京の事務所にお金と食べ物を取りに来るように言われていました。私は、夜になると貨物列車の連結部分にしがみついで、東京へ行きました。スパイ映画そのものです。外国人だから、切符が買えないんです。東京に着くと、一面の焼け野原。運河には死体が浮いている。スイス領事館でお金をもらって、また夜になると貨物列車の連結部に乗って、軽井沢に戻りました。（1/9）

第4回 アントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む

神田外語とともに歩んできた人々の証言



週に1回、水曜日の午後だけと聞いて、
神田外語学院の臨時講師を引き受けました。

1945年（昭和20）8月15日、戦争が終わりました。母は私に上智大学の国際部に行くよう薦めてくれました。でもなかなか学校が再開しないから、アメリカ赤十字で働くようになりました。2カ月ぐらいすると、上司から「きみ、日本語しゃべれるんだよね。この間、アメリカの新聞記者が来て、日本語を話せる助手を捜していたんだけど、会ってみるかい？」と聞かれました。私はおもしろそうなので、会ってみることにしました。

新聞記者の名は、ローウェル・トーマス。『ニューヨーク・デイリーニュース』のトップ記者です。彼は戦後の日本の状況を伝える連載記事を書いていました。私は彼の助手になりました。ローウェルはジープを支給されていたから、私がジープを運転して、宿泊していた新橋の第一ホテルから取材に出かけるのです。あるとき、彼は日本一周の取材の旅に出ると言い出しました。ジープにコンテナを付けて、ガソリンと食料を積み込んで。もちろん私は一緒に行きました。

東京から青森を目指して北上して行きました。食料は持ち込みだったから、旅館では喜ばれましたね。宿代はいらさないから、少し食料をくれないか、と言われました。タバコなんて1箱あげると、お土産をくれましたよ。青森から日本海側を回り、九州へ。そしてふたたび本州の太平洋側を走り、東京に戻ってきました。2カ月間の旅でした。大森と東京、横浜しか知らなかった私にとって、この旅は日本という国を知る貴重な体験でした。

この旅の間、ローウェルは私に記事をタイプさせました。殴り書きだから、字が汚くて読めない。でも、その作業を通じて、私は文章の表現や書き方を学びました。逆にスペリングはよく直しましたね。ローウェルは新聞記者なのに、「スペリングは得意じゃないんだ」と言っていました。





私はセント・ジョセフに通っていた頃、毎晩本を読んでいました。大森の家には図書室があって、父は洋書をたくさん集めていた。父は私に書棚を指差して、「ここから、ここまで読みなさい」と言うんです。嫌でしたね、本当に。でも思い返してみれば、その読書が、文章やスプリングの勉強になっていたのしょうね。ローウェルは、「君には文章のセンスがある」と言って、私に記事を書かせるようにもなりました。

新聞記者も悪くない、と思いながらも2年ほどで辞めました。実は、母と父が離婚しており、母は妹たちを連れてアメリカに行くことになっていました。アメリカの大学で学ばせるためです。私も母についていくつもりだったのですが、母は「あなたは男の子だし、みんなでアメリカに行ってしまうと、お父さんがひとりになって寂しい思いをするから、日本に残ることも考えてみれば」と言いました。父は「おまえの人生だからお前が決める」と言うだけです。私は母の意見には素直に従うほうだったから、日本に残ることを決めました。19歳の私は、英国のパスポートを返却し、日本の国籍を選んだのです。

結局、上智大学には行かず、仕事を続けました。セント・ジョセフの同級生が貿易会社を始めるといので、参加することにしました。同級生たちは日本語が下手だった。私は日本語がしゃべれたから、日本の会社を相手に仕事するには都合がよかったんです。終戦後の日本は物が無い時代でしたから、食料や雑貨、肥料などを輸入しました。少し落ち着いてくると、今度は輸出です。日本には小さな町工場がたくさんあって、質の高い製品を作れるから、どんどん輸出しました。なかでも、ライターとペンナイフはヒット商品になりましたね（※1）。

貿易会社の仕事は30代の半ばまで続けました。ただ、一緒に会社を経営していた友人がアメリカに移住すると決めたので、会社は解散することになりました。私は、まとまった額の分配金をもらえたので、葉山に住みながら、好きな釣りでもして遊んで暮らそうと思っていたのです。そんなとき、ある人から電話をもらいました。

電話をくれたのは、貿易取引で知り合った三洋貿易という会社の営業部長さんです。彼は「ニューヨーク支店長になることになった。実は、神田にある英語学校で貿易実務の講義を持っているのだが、代わりにやってくれないか」と連絡してきたのです。それが神田外語学院でした。週に1回、水曜日の午後だけと聞いて、私はその仕事を引き受けました。1965年（昭和40）年ごろだったと記憶しています。（2/9）

1. 戦後、佐野商店で金物を製造販売していた佐野公一氏もライターを製造していた時期があった。

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第4回 アントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む



学校は教育の場だから、押し付けるのではなく、若い人を導くのが大切だと思います。

30代の後半は、週に1回、神田外語学院で教えて、残りの日は釣りをしたり、遊んだりと自由な日々を過ごしていました。ある水曜日、学院に行くと、ちょうどその日は、スピーチコンテストの発表日でした。当時の学院では、すべての学生がスピーチコンテストに参加し、その成績が重視されていました。私は知り合いの先生に誘われて、コンテストの見学に行きました。

ひとりの女子学生のスピーチが行われていた時のことです。彼女は、「この学校は暴利をむさぼっている。高い授業料をとって、経営者はそのお金を何に使っているかわからない」と言うのです。スピーチの原稿は担当の先生が指導していたはずですが、彼女は本番で差し替えたんですね。

その会場には創設者である佐野公一先生や、佐野きく枝先生もいたはずですが、おふたりは英語が充分には理解できない。コンテストが終わると、教務の職員が、「あの生徒を指導した先生は誰だ？生徒も教師もクビだ！」と教員室に怒鳴り込んできました。

私は、他の教員と話をしました。なかには、「本当のことをスピーチして、クビになるんだから可哀想だよな」と言っている教員もいます。でも、誰も抗議する教員はいません。そんなことをしたら、自分までクビになると思っていたようです。私は学院長に会いに行くことにしました。

学院長室に行くと、佐野公一先生ときく枝先生がいました。私が、スピーチコンテストで学校を批判した生徒をどうするか聞くと、公一先生は「もちろん辞めてもらう。学校が気に入らないのなら、いてもしょうがないじゃないか」と言います。きく枝先生は黙っていました。



私は言いました。「学院長、辞めさせるのは得策ではないと思いますよ。学生も、教員もみんなあのスピーチを聞いています。学校は教育の場ですから、上から何かを押し付けるべきではない。若い人たちを育て、導くことが大切だと思います。それにまったくの根拠がないのなら処分も必要だが、聞くと学費が高いのは事実というじゃないですか」。こう言うと、公一先生は「うちは外国人の先生も雇っていて、金がかかる。だから学費が高いんだ。……ところで君は、教師をやって長いのか」と聞きます。私は「いや、臨時です。週に1回だけです」と答えました。



すると、きく枝先生が口を開き、公一先生に、「ねえ、あなた。この件については家で話しましょう。だから、今日は何も決めないでおきましょう」と言って、私には「グディングス先生にはまたご相談することがあるかもしれません」と言いました。その日は、それで終わったんです。

翌週の水曜日、私はまた学院に来ました。私の机には「学院長室に来るように」とメモがありました。学院長室に行くと、きく枝先生がいました。きく枝先生は「言いにくいことを言っていただいて、本当にありがとうございました。先生がご提案してくれた通り、あの学生は残すことにしました。これから、きちんと理解してくれるように努力して、指導していきます」と言いました。私は、それを聞いて、「それはよかった、先生方もその判断は評価しますよ」と答えました。私は教員室に戻り、先生方に学校側の判断を伝えながら、「話してみれば、分からないわけじゃないと思うよ」と話しました。

その日のことだったと思います。授業が終わると、きく枝先生に「ちょっと、話があるから」と引き止められ、食事に行くことになりました。きく枝先生は、食事をしながらこう切り出してきました。

「先生、学院の職員になってくれませんか。あなたは、きちんと意見を言ってくれる。一緒に、この学校を望ましいかたちにしていてもらえませんか」

私は「残念ですが、お断りします」と答えました。きく枝先生は「なぜですか、待遇ならしっかりしますよ」と言いました。

私ははっきりと理由を言いました。

「公一先生はワンマン経営者です。決めたことには誰も反対できない。私はそういうところで仕事はしたくないんです」

この頃、私はもう40歳ぐらいになっていました。だから意見の合わない組織に自分から入る気持ちはなかった。それに、学校は教育の場です。経営者には経営者の判断があるかもしれませんが、教育機関ではあくまで教育的な考えが尊重されるべきだと思っていましたから。

きく枝先生は、「残念ですが、分かりました。また何かあったらよろしくお願いします」と言って、その話は終わりました。(3/9)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第4回 アントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む



「どこからですか」と聞くと、公一先生は「それはあなたが考えてくれ」とだけ言いました。

私は相変わらず臨時講師のまま働いていました。学院には週に2日、来るようになっていましたが、残りは葉山で釣りをしていましたね。あるとき、公一先生に呼ばれたんです。1972年（昭和47）頃のことだったと思います。

公一先生は、「法律が改正されて、専修学校を認定する制度が始まる。ついては、うちも認定を受ける準備をしているのだが、専修学校になるときちんとした資格を持った先生が必要になる。外国からそういう教員を雇うことはできないのかね」と質問されたんです。

私は、「雇えないことはないと思いますよ」と答えました。すると、公一先生は、「君、調べてくれないかね。語学を教えるにはどういう先生がいいかを」と依頼してきたんです。これはおもしろそうな仕事だと思いました。私自身が日本語を学ぶのに苦労した経験がありましたから。英語を母国語としない日本人に、英語を教える教育というものに興味を覚えたんです。

ただ、責任も重大です。臨時講師とは立場が変わるし、私自身が専修学校で教える資格を持っていなければ、きちんとした調査もできないと思ったのです。日本の教育法についても勉強しなければなりません。当時、文部省が専修学校制度の開始にあたって指定していた講座があって、それを受けに行きました。当時は事務長だった佐野隆治会長と一緒にです。1年間ぐらい、仕事の後にふたりで専修大学に通って授業を受けました。それで、教員の資格を取得したわけですよ。



私と佐野会長がきちんとした資格を取得したことで、専修学校としての申請が現実的なものになってきました。ただ、課題はやはり資格を持った外国人の先生を集めることです。調査をしてみると、アメリカや英国の大学には、外国人に英語を教える科目があることが分かりました。いわゆる、第二外国語としての英語教育ですね。そういった大学に手紙を出して問い合わせると、「この科目ではABCも分からない人に英語を教える方法を教えている。英語の専門学校なら、そういった専門家を雇ったほうがいいでしょう」という回答が返ってきました。



調査の結果を公一先生に報告すると、「これまでは日本にいる外国人を雇って教えさせてきた。専修学校にするのなら、きちんとした資格者を教師として雇わなくてはいけない。君、集めてくれるかね」と言うのです。私が、「どこからですか」と聞くと、公一先生は「それはあなたが考えてくれ」とだけ言いました。

公一先生が出した教員採用の条件はふたつだけでした。ひとつは、第二外国語としての英語を教える資格を持っていること。もうひとつは、あまり年齢が高くない、ということでした。年齢が高いと、結婚していて、子どもがいる場合があるので、手続きが面倒になるし、費用も大幅にアップしてしまう。独身で身軽に日本に来られる人がいいというわけです。

私は英国とアメリカの大学を回りながら教員の採用を開始しました。ふたつの国では卒業のタイミングが違うので、何度も行かなければならない。公一先生は私には授業を持たせずに、教員採用の仕事に専念させてくれました。こうして、神田外語学院では1974年（昭和49）から、外国からの教員採用が本格的にスタートしたのです。（4/9）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第4回 アントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む



学院の教育についてはあなたにお任せします。
この学校を認められるレベルに引き上げてほしい。

昭和51（1976）年、神田外語学院は文部省から専修学校として、正式に認定を受けました。学院の生徒は増える一方でした。その頃は、40クラスぐらいあって、生徒数も2000人ぐらいいましたね。教員も200人近く必要でした。私は、春と秋に英国とアメリカに行って、教員の面接を行いました。何しろ応募者の数がすごかった。やはり外国に行けるチャンスだから。若い人たちにしてみれば、日本に来ることは冒険ですからね。

何年か採用を続けていると、どんな先生を選べばいいかも分かるようになってきました。学歴だけじゃないんです。大切なのは、日本の社会、そして文化に適應できるかなのです。それと、年齢を問わず、頑固な人は外しましたね。外国人に言葉を教えるにはフレキシビリティが必要ですよ。

こういった採用活動を始める前の神田外語学院では、採用の方針に「軸」がなかったように思えます。日本国内で募集して、日本にいる外国人を雇う。それも日本人が日本人の感覚で採用する。だから、うまくいかないことも多々あったのです。幸い、私は英国と日本の両方の文化を理解しています。だから、外国人の応募者が日本に合うかどうか分かったんですね。どんなに優れた資格を持っていても、日本の文化に溶け込めないだろうと判断したときは、採用しませんでした。

1970年代、東京には数えきれないほどの英語学校がありました。ただ、神田外語は他の学校とはっきりとした違いがありました。まず、第二外国語としての英語を教える資格を持っている人しか雇わない。教員の質を一定以上、保つということです。雇用の契約がはっきりしている。給料はどこよりも高い。大学の教員よりも神田のほうが高いぐらいでした。そして、カリキュラムでは職業に役立つ英語教育を目指していました。専門学校というのは、職業を得るための学校だから、明日からでも役立つスキルを身につけさせてあげなければならない、という方針でした。





私自身の生活にも変化がありました。ミシガン大学に教員の面接に行ったとき、日本から留学して英語教育を学んでいる女性たちがいました。そのうちのひとりを神田で採用したのですが、私はその女性と結婚しました。それまでは自由な生活を謳歌していましたが、結婚するのであれば、本腰を入れて仕事をしようと思ったんです。自分のなかで、神田外語学院を、外国語を教える日本一の学校にしよう決めました。

昭和53（1978）年、佐野公一理事長が亡くなりました。佐野きく枝先生から、葬儀委員長をやってくれないかと頼まれました。葬儀を仕切る役ですね。日本の葬式でそんなことをやったこともなかったのですが、助手をつけると言われて引き受けました。

葬儀が終わると、きく枝先生と佐野隆治会長から呼ばれました。きく枝先生はこう言いました。

「先生、佐野学園の職員になってくれませんか。学院の教育についてはあなたにお任せします。経営については隆治がやります。この学校を語学学校として認められるレベルに引き上げてほしい。必要なものはすべて用意するから」

私は海外で教員の採用を担当しながらも、立場は講師のままだったんです。自分に学院の教育を任せてくれる。勉強が必要であれば好きなだけしていいとも言われました。きく枝先生の、その言葉を受けて、私は神田外語学院の職員になることを承諾しました。

きく枝先生は、私が臨時講師をしていた時代も、何かあると意見を求めてくれました。私が他の先生よりも年齢が高く、そして日本と英国の両方の文化を理解していたからでしょう。私は学校経営の専門家ではありません。でも、日本人と外国人の間で、何ができて、何ができないかを感覚的に理解していました。私が自分の意見を言うと、きく枝先生はとても素直に聞いてくれましたね。

きく枝先生には夢があった。日本の女性を世界レベルで通じるものにしたという夢がね。外国人と対等に向かい合える能力を身につけさせたい。でも、日本人女性としての立ち振る舞いは失ってはいけない、という信念を持っていました。私はその考え方に大いに賛同しましたね。きく枝先生は、佐野学園の理事長、そして神田外語学院の学院長となり、学院での教育を私に任せながら、ご自分では日本の女性のマナーについての指導を積極的にされていました。（5/9）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第4回 アントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む



教員の組合には佐野会長とふたりで対処した。明け方の4時ごろまで交渉が続いたこともある。

佐野隆治会長とは、ずいぶんと色々な仕事を一緒にしました。彼はずっと事務長だったから、私とは仕事面で接点が多かったですね。



私が、正職員になってからは、組合への対応も一緒にやりました。外国人の先生方の組合です。総評（日本労働組合総評議会）が労働運動のプロを送り込んでくるわけですよ。彼らは大学も出ているし、英語もしゃべれる。頭も切れますよ。そういう人が、学院の過激な先生に知恵を与える。外国人の先生が日本の労働運動のテクニックを知っているわけがありませんから。

外国人の先生は、日本の制度に不満を持っています。私には彼らが何を感じて、何を言おうとしているか、たいていは分かりましたよ。待遇を英国なみにしろ、アメリカなみにしろ、と彼らは主張します。労働時間を減らして、休暇を増やせよと。だけど、それは無理な話です。日本にまだ3年ぐらいしかいない先生が組合の副委員長になっている。日本に長く住んでいる先生方は、そういう活動には加わりませんでしたよ。

私には彼らの主張が理解できるから、佐野会長とふたりで対処しました。明け方の4時ごろまで交渉が続いたこともあります。労働時間も減らしたし、授業のほかに学生の評価をする時間も認めました。そんな待遇の専門学校なんてほかにはありませんでしたよ。



昭和57（1982）年、私は神田外語学院の副学院長になりました。学院の職員になって4年目のことです。教育の世界では四季折々にさまざまな行事があります。でも、さく枝先生は「私はもう歳だから、行事に出るのはしんどい。あなたに任せるから」と言って、私を副学院長に任命したのです。

昭和63年（1988）年1月11日、大学が開学した1年後に、佐野さく枝理事長がお亡くなりになりました。事務長だった佐野隆治さんが、佐野学園の理事長、そして神田外語学院の学院長に就任しました。（6/9）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第4回 アントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む



タスクを解決しようとするれば
学生は自然と努力するようになりますよ。

話は少し遡りますが、1980年代になると佐野きく枝先生と佐野隆治会長は大学の設立に向けて本格的に動き出していました。学院で学び、大学でさらに学問を続けたいという学生がいたのですが、受け皿になる大学がない。英語に関する力はしっかりと身につけているのに、高校生と一緒に受験して、1年生からやり直さなければならないのです。そんな学生たちが編入できる大学を設立したという想いがおふたりにはありました。

大学の設立については、私もずいぶんお手伝いをしました。学院の教員を採用するうえで、英国やアメリカの大学とパイプができていました。そのひとつにハワイ大学の教育学部があったのです。ジャック・リチャーズ教授という知り合いがいて、彼に神田外語大学へ来てもらうよう要請をしました。ただ、彼が来られなくなり、フランシス・ジョンソンという教授を推薦してきました。

私はジョンソン先生に、「この大学を世界レベルの大学にしたい」と伝えました。ジョンソン先生は、その気持ちを分かってくれて、それなら手伝おうと日本に来ることを快諾してくれたのです。

ジョンソン先生は、外国人に英語を教えるためのテキストをたくさん書いていました。大学開学のために来日したジョンソン先生に、私はひとつの相談をしました。神田外語学院のカリキュラムの改革です。それも根本的な改訂を私はすべきだと思っていたのです。



私の母国語は英語です。日本語は、日本で生活し、仕事をするうえで、必要に迫られてしゃべれるようになったのです。仕事をしながら、敬語も覚えました。日本語の敬語は難しいですよ。でも、貿易の仕事で年上の方と話をすれば、敬語を使えなくてはならない。目的があったから、課題があったから、しゃべれるようになったのです。



学院でもそういった授業ができないかと考えていました。学生に課題を与えて、その解決を通じて必要な言語を学ぶようにするのです。目的があれば、言葉を使って説明もするし、説明も受けなければならない。その状況があれば、学生は自然に努力するようになりますよ。

ジョンソン先生と話しているうちに、それが「タスクベース」という考え方であり、英語の教育法では先端の分野であることが分かりました。では、誰に手伝ってもらえばいいか。カリキュラムを作り直して、新しくテキストを作るのであれば、市販しても売れるぐらいの内容にしたい。第二外国語としての英語教授法の研究で中心的な人物でなければいい成果は生めない。そうやって絞り込んでいくと、候補者は世界に10人ぐらいしかいないんです。

ジョンソン先生は、タスクベースの分野で最先端の研究をしている人物に、クリストファー・カンドリン教授がいると話してくれました。英国人で、当時はオーストラリアのマッコリー大学で研究をしていた人物です。もうひとり、ディヴィッド・ヌーナン教授です。彼はカンドリン教授よりも少し若かったけど、ジョンソン先生いわく、かなり頭の切れる方で、とても優れた教材を書ける研究者だということです。

おふたりと友人だったジョンソン先生は、「まずは日本に呼んでみるから、会ってみましょう。よかったら話を進めればいい」と提案してくれました。ジョンソン先生の橋渡しで、来日を実現し、カンドリン、ヌーナン、ジョンソン、そして私の4人で色々なアイデアを出しながら、学院のシラバスの青写真を描きました。ただ、時間もかかるし、莫大な費用もかかることも分かりました。

当時、きく枝先生の後を継いで、理事長になっていた佐野隆治会長に資料を使いながら説明をして、このプロジェクトができるかを相談しました。佐野会長は、「その結果が出るんだったら結構ですね。先生、それ進めてください」と了解してくれました。言われたのは、ただそれだけです。すごい責任感を感じましたね。

カンドリン、ヌーナンの両教授は正式にコンサルタントを引き受けてくれました。世界でもひっぱりだこのおふたりが引き受けてくれたのは、ジョンソン先生との信頼関係が大きかったと思います。(7/9)

第4回 アンントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



日本人の先生方にはずいぶんと嫌われました。でも、学生のためには大胆な改革が必要でした。

平成2（1990）年、神田外語学院でタスクベース・シラバスの研究が始まりました。学院の先生方にも参加していただき、プロジェクトチームを作りました。カンドリン教授は、マッコリー大学で教えなければならない期間以外は、日本に来ていたし、ヌーナン教授も研究休暇をとって日本に滞在していました。確か、8カ月くらい集中して研究を行いました。

今思えば、非常に素晴らしい研究の場でした。新しい教材の案がまとまると、学院の教員に渡して、実際の授業で試してもらいました。教員はクラスでの反応を記録するとともに、自分の意見を書いて報告してくれる。アイデアをすぐに実際のクラスで試せて、日本人の学生の反応をテキストの内容に反映できたのは本当に恵まれた環境でした。

週に1度はジョンソン先生が幕張の大学から神田の学院に来て、教材の内容についてディスカッションする。ジョンソン先生は大学で実際に学生の指導をしているから、その立場から助言してくれました。この期間は私にとっても非常に勉強になりました。研究というものが、どういうものかを知りました。それに、3人の先生方は学者であり、高い教養を持っている。そういった方と、どうやって話して、何をどう伝えればよいか、学ぶことはたくさんありました。



教材が完成し始めると、学院の教員を対象としたタスクベース・シラバスについての研修会を行いました。もちろん、講師はカンドリン、ヌーナンの両教授です。ここで教員の反応が分かれました。外国人の教員は、新しい教授法を学ぶことに意欲的です。でも、日本人の教員は違いました。自分はすでに教員の資格を持ち、キャリアもある。それなのに、なぜ新しい方法を学ぶなければならないのか、と彼らは反論するのです。研修会では発表もあるので、それも嫌がりました。「ほかの先生と比較されてしまう。頼むから恥をかかせないでくれ」と言ってくるのです。でも、それじゃあ、教員は務まらないでしょう。



私は日本人の先生方にずいぶんと嫌われたと思いますよ。でも、どうしても日本人の先生方には変わってもらわなくてはならなかった。教員自身が学び続けなくてサボタージュすると、不幸な思いをするのは学生です。残念ですが、新しい方針に沿えない先生には辞めていただきました。ですから、タスクベース・シラバスの導入というのは、教授法の改革であるとともに、組織の改革でもあったのです。私が初めて神田外語に来たときは外国人の教員はひと握りでした。でも、その後の40年間でその比率は逆転していきました。人間関係で苦労したし、ずいぶんと嫌われたけれど、学生たちのことを本当に思えば、大胆な改革は必要だったのです。平成6（1994）年、約4年をかけたタスクベース・シラバスは完成し、学院の教育に導入されました。この年、私は神田外語学院の第4代学院長に就任しました。（8/9）

第4回 アントン・グディングス 神田外語学院第4代学院長
課題と向き合い、言葉を育む

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



「これをやる」と決めたとき、
人は生きることと張り合いができます。

私は学院長をしていた頃に卒業生たちにこう言いました。

「人生において友達を大切にしてください。そして必ず目的を持ちなさい」

そのふたつがあればたいていは間違いないと思います。自分自身の人生を振り返ってもそう思いますね。セント・ジョセフ時代の友人で、いまだに付き合っている友人がいます。75年になりますね。2年に一度は彼のいるサンフランシスコに会いに行くし、スカイプで話しもします。やはり、大切に思える人がいなければいけないですよ。

もうひとつは目的を持つこと。男性には仕事がありますから、生涯の仕事を決めたのであれば、とことんその道を行かなきゃいけないですよ。決められない人が多いでしょ。あるいはこんな仕事、本当はしたくないけど、生活のためにやらなければいけないとか。そういう時期もあるかもしれない。でも、目的を持っていないければ、達成感もないし、社会にも貢献できないんですよ。

私が神田外語で過ごした40年間はわりと充実した日々だったと思いますね。ここでの仕事に本腰を入れるまでの私は自由主義者で、いろんなことをやってきました。でも、「これをやる」と決めたとき、そういう目的ができたとき、生きることの張り合いができました。



私が自分の生きる目的を決められたのは、佐野きく枝先生がいたからです。あの方は本当の教育者であり、模範的な先生です。教育に対してのビジョンを持ち、もっとよくしたいと絶えず考えていた。そのためには何をしなきゃいけないのか、何ができるのかと。そういう風に考える人って、あまりいないですよ。



そして何かやるときは、「グディングス先生、頼みますよ」と投げられるんです。そう言われると、やらなきゃいけない。方法を探さなければいけない。人との接し方が本当に上手でした。上の人間として、下の人間を育て、上に行けるようにしてあげるのが、きく枝先生は本当に優れていたと思います。(9/9)

アントン・グディングス (Anton Goodings)

昭和3 (1928) 年生まれ。横浜にあるインターナショナル・スクール、セント・ジョセフで学んだ後、早稲田大学に入学。空襲により学校が閉鎖になったまま終戦を迎える。『ニューヨーク・デイリーニュース』紙の日本特派員助手を2年間務めた後、貿易会社「KONWAL」を共同経営。同社の解散後、神田外語学院の臨時講師となる。昭和47 (1972) 年より講師となり、外国からの教員採用において中心的な役割を果たす。昭和54 (1979) 年に神田外語学院の職員となる。昭和57 (1982) 年より副学院長に就任し、タスクベース・シラバスの構築に力を注ぐ。平成6 (1994) 年に創設者の家族以外で初めて学院長 (第4代) に就任する。平成15 (2003) 年に退職。現在は、千葉県鴨川市で、家族と愛犬とともに暮らし、趣味の釣りを楽しむ日々を過ごしている。平成27 (2015) 年7月永眠。享年86歳。